ルナティック・タイド

Phenomenon

「あ、ルナ！　」
「マリーやっほー」
「ねぇルナ聞いてよサイテーなんだけど」
「なにどうしたの」
「さっきそこでキッモいおじに声かけられたの。かわいいですねぇ、って。『ぼく、暇なんですよぉ。これから一緒にカフェでお茶とかしませんかぁ』って。万札手にチラつかせながらね。ガチ最悪。気分悪い」
「それはドンマイすぎる笑。なんでおじはウチらに話かけていいと思ってるんだろうね。いいわけねぇだろ」
「がちそれな。死ねよクズ」
　マリーはそう言いながら長い爪にピンクベージュの髪を巻き付けている。爪と髪は長いほうがかわいい、は彼女の持論であった。わたしもそう思う。
「マリー今回爪いい感じじゃん」
「でしょー！　これチップでセルフなんだよねー！　やっぱこれかわいいよね！　」
「さいこうすぎる。がちかわいい」
「でもスカルプやりたいなぁ。チップだとなんかパチモン感でちゃうし。まぁウチら学校あるからむりだろうけど！　」
　マリーは看護の専門学校、わたしは四年制の大学に通っている。二人とも十九歳だ。車は運転できるのにお店でお酒は飲めない。でもライブの煽りで『十代！　』って叫ばれて声を出せる。これは大きい。正直今わたしたちがいる界隈に若い子は少ない。二十前半みたいな見た目をして三十過ぎ、なんてざらにある。ライブハウスはキレイな人ばかりだ。同年代だと思って話していたら『今度小学生になる息子がさぁ』とか言われて度肝を抜かれたこともある。でもだからこそ若い私たちは界隈のお姉様たちにもよくしてもらえた。「若い」ということがステータスであり、それだけで優越感に浸ることができた。そしてこれから年を重ねていくことへの恐ろしさは増すばかりであった。

「先生って何歳なの？　」
「え、何歳くらいだと思ってんの？　」
「んー、二十は越えてるでしょ？　」
「あーね」
「二十一とか？　」
「わたしまだ十九だよ」
「え、わか！　先生大人っぽいね」

「それって褒めてる？　」
「褒めてる褒めてる」
「どーも。じゃあ次ここね、さっきやった因数分解の応用。習った公式使えるとこで使っていけば解けるから。ここまで解けたら丸つけで。分かんないとこあったら些細なことでも声かけてね」
　この九十分でチェキ二枚分。ツーショなら三分の二枚で授業一コマぶんじゃ足りない。比べられる量、元にする量、割合。「みはじ」みたいに「くもわ」もいけるよー。これは学校で教わる生徒は少ないみたいだ。小中学生や高校生に数学教えたお金で本命とチェキ撮ってんの笑える、いや、そうでもないか。人生ってそういうもん。みんな幸せになりたいもんね。

　ほんとわたし何してんだろ。さまざまなものが中途半端。こんな塾講師のバイトなんかやめてなっがいネイルでもしてやればいい。あの子は看護の専門学校だから無理だろうけど私は別に学校にネイルは禁止されていない。ただこのバイトの上の人から長すぎたりごてごてしすぎたりしてるのはやめてねー、と軽く言われているだけだ。それもかなり緩いものであると思うから、長い爪も少し押せばいける気がする。この塾講師のバイトで女が私しかいないことも大きいだろう。塾長にはぜひ私の言葉をまるっきり綺麗に信じて、この世の女の基準がこの私であると思い込んでほしい。

　個別指導の塾ってほんのりキャバクラに似ている、と思う。実際にはキャバクラで働いたことも行ったことすらないから詳細は分からないのだけれど。
　私が働いている塾では定期的にカウンセリングがある。プリントにさまざまな事柄を記入してもらい、それをもとにカウンセリングする。不安な科目はあるか、次回のテストの目標、それを達成するために具体的に何をするか、など。基本的にはそんな程度だが、相手が小学生だと、塾の好きなところは何ですか、なんて質問もある。
　ある小学五年生の女の子がその欄にこんなことを書いた。
「私のお話を聞いてくれるところ」
　新しく高校一年生になる、中学三年生のころから受験勉強を見ていてかなり仲のいい女子生徒はこう言った。
「先生聞いてー。うち高校で体育委員になったのね、でさー体力テストあるじゃん、でーその結果書き込む紙集めないとなんだけどー、うちは一回テキトー

にばっと集めてから後で番号順に並べようと思ってたのね。でもなんかクラスの陽キャたちが勝手に紙集めはじめてー、そのまま先生に出したのね。そしたら先生が『なんで番号順じゃないんだ！　』って怒り始めて、なんかうちが悪いことになった。うち、ちゃんとみんなの前で言ったんだよ、最初にばっと集めて後で番号順に並べますって。なのに陽キャたちがそのままだしてさぁ。これうち悪くなくない？　でもママに話しても全然共感してくんないんだよ！　ひどくない？　」

　お金を払って誰かに話を聞いてもらうことは私たちには必要なのかもしれない。ここまでは相手が女の子だからまだいい。こちらはただ興味ありげに相手が心地よくなるよう話に相槌を打てばいい。しかし相手が男子生徒だった場合、私はこの自分のたくさん褒められてきた顔面に感謝することになる。たぶんブスだったら扱われ方が違っていただろうから。女は綺麗じゃないと、話すら聞いてもらえないことも多々ある。相手が子どもだとしても、だ。

　お金をもらってなきゃ、私はこんなに優しいイイ女じゃないよ、現実を見て、って思っちゃう。おそらくこの男子生徒は学校じゃ女子生徒から全く相手にされないのだと思う。私だってお金をもらってなきゃあの男子生徒のつまらない話を相槌をうちながら面白そうにに聞いたりしない。

　わたしだっていっしょ。撮影会で本命に「かわいいね」って言われたとて、ぜんぶ営業。分かってる。前回本命に言われた「頭小さい人の隣並びたないわー」って言葉一生引きずる。ぜんぜん営業。大丈夫、わたしは分かってる。

「すみませーん、今日の三番目の〇〇ってバンド、上一か下一ってあいてますか、？　」
「すいません入っちゃってるんですよー」
「じゃあ二列目のドセンって、」
「あーそこならあいてますー」
「ありがとうございます！　入りたいです！　」
「おっけーでーす」
「ありがとうございます！　」

　対バンの交渉で仕切りのお姉さんと話すのは緊張する。できるだけ人当たりよく丁寧にしゃべる。ここで嫌われたらとうとうわたしの居場所はない。いや、別に私は大学でもバイト先でもうまくやっているほうだと思うけど。でもここに来てなかったらこんなにバカみたいにいっぱいバイトに入ること

もなかっただろう。バイトもたくさん入らなきゃ、きっと生徒ともほかの講師ともここまで仲良くはなっていない。本命がいなかったらわたしの人生は確実にもっと薄っぺらくなっていたと思う。ただダラダラと生命を継続していくだけだっただろう。生きる理由を失いたくない。基本的に暇な瞬間がない。それはいいことなのかわるいことなのか。

ライブハウスは見わたすかぎりかわいい人しかいない。みーんなかわいい。ほんとうに。骨格から一般人とは違っている。なぜだ。ネットで見るかわいい子が本当にリアルで存在することを観測する。全員加工だと思ってた。流行りのアイドルよりもかわいい子がごろごろいる。意味がわからない。しあわせ。この空間ではわたしがいちばんブスでデブでスタイル悪い。自己肯定感はどか下がり。でもかわいいに対するモチベーションはどか上がり。大学の理学部棟に籠ってたらそもそもかわいくなりたいとか思わない。あそこでは見た目以上に大切なものがあると思う。ちゃんと中身を見てくれそう。でもここでは違う。やっぱり見た目に囚われちゃう。女の子はかわいくないと見つけてもらうことすら叶わないんだって。本命のせいですーぱーるっきずむがーるだよ。あはは。わたしいつまでガールとか言えるんだろう。ガール、少女。もう十九歳だよ。あと数か月で十代じゃなくなっちゃうよ。たすけて、わたしのおうじさま。まだ痛くない、わたしはまだ十代だから。大丈夫。だいじょうぶ。ひらがながかわいい。

かわいいから、チョコスプレーをかける。焼き肉屋、セルフのソフトクリームでチョコスプレーをふんだんにかける。同級生の男子に「好きなの？」と聞かれてほんのり返事に困った。別に味が好きなわけじゃない。そもそもおそらくチョコスプレーに味を求めている人はかなり少ない。かわいいかなと思って、明後日の方向を向きながら「かわいいからかけた」とぜんぶひらがなで言ってやった。私は別にその男子に好意を寄せているわけじゃない。でも、かわいいだろうな、と思ってやった。私はかわいくないといけないから。価値がないから。私はまだ痛くない、私はまだ十代だから。タイムリミットあと四か月。

「変なこと聞いていいですか」
「あー、なんですか、」
「鈴川先生ってラーメン好きですか？」
「あー、んー、普通ですかねぇ、」
「あーそうなんですね、よければ明日のバイト終わ

りに新しくできたラーメン屋さん一緒にどうですか、って思って」
「あー、明日ですかぁ、えーっと、ちょっと待ってくださいね、あー、すみません、明日はちょっと厳しいですねー、すみません」
「あーそうなんですねぇ、じゃあまた誘ってもいいですか？　」
「あー、まぁ、空いてれば、」
　いいわけねぇだろ。私は十九歳の女、あんたは三十過ぎのおっさんだからな。身の程をわきまえろ。大人ならおとなしく金払ってキャバクラにでも風俗にでも行ってほしい。私で無料で済ませようとするな。私はお金を稼ぐ以外の目的でここに来てないからな。あんたらと仲良くなりたいと思う気持ちは毛頭ないからな。勘違いするなよ。私が生徒とフレンドリーに明るく接しているのは向こうがお金を払っているからだ。それをお前は無料で享受できると思うな。ふざけんな、クソが。
　私は私が特別好きでもない相手から依存されることを大いに嫌う。私が最もメインで属しているコミュニティは大学だ。しかし、塾長やすでに必要な授業を取り終えて大学に行っていない四年の先輩なんかはメインのコミュニティがここの塾になる。私にとってはサブだから、ここで馴れ合いなんていらない。雑談なんてせずに早く仕事を終わらせて帰りたい。仕事以外の、印象をよくするためだけのサービスの会話なんかしたくない。友達も恋人もメインのコミュニティである大学で探しまーす。あんたらはいらないでーす。まぁ彼氏は本命がいるからいらないですけどねー。仕事用で交換した（勝手に追加された）ＬＩＮＥで個人的なこと送ってこないでくださーい。あんたが見つけたかわいい猫の動画もあんたがディズニー行ったことも私は興味ありませーん。キモいでーす。まっじで話しかけてくんなよクソが。
　依存といえば。中学のころ、クラスでいじめがあった。結構わかりやすかったから当たり前に先生も含めた全員が気づいていた。私は中学で生徒会長をしていたから、このいじめに助長するのは好ましくない。もちろん生徒会長なんかやっていなくても好ましくないのだが。みんなそのいじめられている生徒と話すことを嫌がった。このいじめられていた生徒をＫとする。Ｋは何を話しかけてもみんなから無視されることを学習し、そのうち誰にも話しかけなくなった。でもそうはいってもまだ中学生の少年だ。いくらか希望を持っていて、生徒会長である私であれば人間として扱ってくれると考えたのだろう。
「す、鈴川、さん、あ、これ、プリン、ト、」

もう昼休みだけれどKはこれが今日学校に来てから初めて発した言葉だったのだろう。ひどく喉がしまっていて声が上ずっていたことを覚えている。

「ありがとう」

私はたった一言そう返した。ただ、しっかりKの目を見て優しく微笑んだのがいけなかったのかもしれない。以降Kは、クラスでたったひとり、私にだけ話しかけてくるようになった。不愉快極まりなかった。とにかく気持ち悪かった。迷惑でしかなかった。でも、無視をするわけにもいかなかった。私は生徒会長だったから。模範であることを求められたから。つらかった。しにたかった。なくなりたかった。

私は生徒会長だったけれど、誰にでも優しく接するように心がけていたけれど、みんなにとって模範的な生徒であるようにしていたけれど。

聖女さまではない。

私もあなたと等しく、みんなと等しく、ひとりの人間だからね。勘違いしないでね。そのうち私が先にしんじゃうからね。

依存といえば。量子力学では波動関数は時間依存性があるけれど、確率密度の時間依存性はないらしい、関係ないね、沈黙。

私は人に依存されることの不快感、気持ち悪さを嫌というほどに知っている。また、わたしは好きな人には幸せになってほしいタイプだ。ずっと笑顔でいてほしい。私は本命のことがこんなにも大好きで愛していて重すぎるほどの感情を抱えている。板ばさみだ。しあわせになれない。

でも、前述のものとはここが違う。私と本命を繋いでいるのは気持ちでも欲望でもない。お金だ。なんて安心感。お金は汚い、ってよく言われるけれど、私はお金は綺麗だと思う。さっぱりしている。清潔感がある。私に「かわいい」って言ってくれる本命の瞳の先にあるのは、わたしのよく褒められる顔面でも、「モデルとかやってるんですか」と聞かれる身体でもない。他でもないお金だ。だからこそ私は安心してこれを続けられる。撮影券一枚三千円。私はそれがあれば十分に幸せを感じられる。気持ちなんてなくていい。私はそのライトさが大好きだった。

誰かに愛されることなんてもう諦めている。私ももう十九だから、さまざまなことに諦めがつく。ど

うせ私は誰からも愛されることなく死んでいくんだ。だったら愛されごっこくらいしてみたい。わたしはわたしをしあわせにする。そこにお金をかける価値は大いにある。

「ねぇルナ、しにたい笑」
「……ね。わたしも笑」
「わたしたち、これからどうやって生きてくんだろうね」
　ほんとうに。このままいったら破滅の未来しか見えない。わたし、おとなになれない。ずっとこのままでいたい。バンギャのお姉様方はなんのお仕事をしてるんだろ。あんな長いネイルをして。夜職か。知ってた。お金いっぱい稼いで本命にも美容にもファッションにも整形にもお金を使える夜職のお姉様方に塾講バイト一本のわたしが勝てるわけない。勝とうなんて、思っちゃ、いけない。勝てる筈が、ないじゃないか。誰に、何者に、勝つつもりなんだ。溜息。呆れ。私は、王子さまのいないシンデレラ姫。既知。
　ライブ終わりにマリーと終電まで夜ご飯食べる時間が好き。とはいえ、わたしは栃木、マリーは山梨住みだから終電は早いのだけれど。ライブの余韻にひったひたでまだどこか夢の中にいるような心地でふたりでふらふらゆらゆら歩く。何気にまじめにまだ二十歳じゃないからお酒は飲まない。どっかの居酒屋か、チェーン店に入る。居酒屋ではジョッキでジャスミンティーを飲んだ。東京のこだわっていそうなお店は高そうでこわくて入れない。今日は赤羽のコメダ。
「なんでうちらあいつらのこと好きなん？　」
「えそれな。でもやっぱ撮影会行くと好きだし離れられないよねー」
「がちそれ！　撮影会行っちゃうと沼るよね。特にルナの本命撮影会すごいじゃん」
「そうなの！　めっちゃ話うまいしおもろいし慣れてるなーってかんじ！　今日なんか去り際にほっぺぷにゅってされたからね？！　」
「え！　やば！　いいなぁ。私の本命麺今日たぶんキスマついてたんだよねー、あの位置ならギリヘアアイロン失敗しちゃった説も考えられるけど、」
「まあ女だろうね。わたしの本命もたぶん女の一人や二人や何人かいるよどうせ」
「ルナの人間不信おもろ」
「マリーだってたいがいじゃん」
「てかプロならキスマくらい隠せよな、プロ意識低い」

「それはわたしも思う。期待はしてないけどせめて隠す努力。うちらのこと舐めてんのってかんじ」
「ね。とか言いつつ離れられないうちらって笑」
「ほんそれ笑。結局うちらもばかだから笑」
「てか聞いて！　今日やっと本命の指輪聞いた！」
「あー、マリーが先週くらいから言ってたやつね」
「そそ！　十日前くらいから毎日本命がつけ始めたやつだからどこのか気になってて！　特定してたのであってた！」
「やっぱジャスティンだったか」
「うん！　わたしもおんなじの買う！」
「お！　いいねー、本命と同じアクセ」
　わたしの本命麺はボーカルでマリーの本命麺はドラム。いわゆるヴィジュアル系のドマイナー盤。通称ドマ。動員は三十人もいればいいほう。今回のハコでは二列目ですらモッシュで動いてくれなくて少し残念だった。麺はメンバー、盤はバンドの略称。ハコはライブハウスのことで、モッシュはバンギャ全体が上手（かみて）や下手（しもて）、前後に移動する振りのこと。ちなみにバンギャはヴィジュアル系バンドのファンのこと。主に女。男はギャ男。推しじゃなくて本命。推しって言われると大きな違和感。わたしたちの愛は、そんなに軽くない。舐めないでほしい。激重だからね。刺すよ。ほんとう、大悪党だよ。

「てかあの人たち売れる気あんのかな。マリー最前だったから気づかなかったかもだけど、今日二列目でもモッシュで動いてくれなかったー」
「えがち？！　さすがに三列目くらいまでは動いてると思ってたよ」
「それな？　二列目でも振りまともにやってるのわたしくらいだったかも。わたしの両隣折り畳みすら腕しか動かしてなかったーつらー」
「まー今回ハコ横に広かったしねー。撮影会の列も結局いつめんしかいなかったし新規ついてなさそうだよね」
「もうちょいＳＮＳがんばってほしい」
「ね。うちの本命週二くらいでしかストーリーあげてないわ。ライブは週一近くあるのに」
「供給少ないのがち病むからやめてほしいー」
　どうせバンギャなんかみーんな病んでるよ。じゃないとライブハウスなんか通わない。ちゃんと現実世界で満たされて、お金なんて払わなくても愛してくれる人がいればここに来る必要がない。みんなどっかおかしい。でもだからこそわたしは存在を許される気がする。コミュ障発揮して意味わかんないこ

としゃべっちゃっても、なんか大丈夫。だってみんなおかしいから。互いにコミュ力に期待していないし、変なことを口走ってしまっても「そういうことあるよねー」ってなるから変に緊張しなくていい。「そういうことあるよねー」は普通の友達から言われたら気を遣われてるな、で申し訳ない気持ちになるが、バンギャ友達から言われれば本当にあるあるなんだな、で信じられるからいい。わたしがいちばん素直にわたしで居られるやさしい場所。

今日、地元の道の駅に行った。デブとブスとババアしかいない。知らぬ間にこの空間にいる全員を見下している。私もあっという間にルッキズムに支配されていた。でも、デブブスババアと思わずにはいられなかった。なんのため？　知らん。でももう無意識でそう思ってしまう私なのだ。

幸せそうな老夫婦が、その道の駅の名物であるモンブランを二人で分け合って食べている。ブス同士が。最初に出た感想がそれだった。今はこんなだけど若いころは美しかったのかな。いやどうだろう。とっても幸せそう。人生の模範解答。十年前の私ならば、こんな当たり前の幸せが自分にもきっと訪れるのだろうとなんの根拠もなく漠然と思っていた。でも今はまったく思えない。手の届かない空高い星。当たり前の幸せは諦めている。幸せになれない。幸せになれるのは選ばれた人だけ。確実に私ではない。さみしい。でもバンギャの友達とみんなで婚期逃がそうねって言ってる。今の私にはそれが救い。みんながいる。ハコでの当たり前になら溶け込める。諦めると、途端に楽になる。人生が楽しくなる。少なくとも、今、みんなと頭振ってる時間はしあわせ。

「え、あいつらやばくね？　」
「バンギャ？　ってやつ？　俺ショート動画で見たことあるわ」
「あー俺もあるかも。みんなで一斉にヘドバンしてるやつ笑。宗教かって笑」
「な。関わりたくねー笑」

「本命の前で頭振ってるうちらがいちばんかわいいから」

ライブハウス前、会場時間まであと十五分、マリーが男たちを睨みつけながら低い声で言った。長くて硬く鋭い爪がマリー自身の白く柔い手のひらに食い込んでいる。その少し上には約三センチの赤黒い線が数本並んでいた。前会ったときより増えてい

る。彼女の肩はいつも以上に細く、儚くわたしの瞳には映った。ビル風に吹かれてどこかに消えていってしまいそうなほどに。このか細い肩をやさしく引き寄せ抱きしめるのは誰だろう。彼女はこんなにもかわいらしく、かわいそうなのに。わたしはそのとき彼女の左手の薬指にあのリングが光っているのを見た。

強がっていても本当はわかってるよ、みんな、ふつうのかわいいすてきな人がいいんでしょ。わかってる。

ほんとわたし、いつから間違えたんだろ。小学校高学年あたりからボカロの病み曲ばかり聞きまくって、ずっとしにたかった。校舎の屋上を眺める瞳には憧憬と羨望がやどった。高校の時は地雷っぽかった。そこでも病んでて、手首は人に見せられなかった。夏でもクロミちゃんの長袖ジャージを着ていた。前髪重めぱっつん姫カット耳上ツインテール。そして大学生になればバンギャになってライブハウスで頭振ってる。本命にチェキとツーショ積んでる。この短い期間で何万何十万積んだんだろう。一年前のわたしでは想像もできなかった。でも一貫性がないこともないのかもしれない。わたしって、最初からダメだったのかな。生まれた瞬間からだれからも愛されないことが決まっていました。はい。これも既知。

「ねぇなんで結月ってそんな不幸になりそうな方向に進んでっちゃうわけ？」
「知らんー。しあわせになれないー」
「ライブ行くのやめなよ」
「それは絶対むり。命綱切られたらしんじゃうー」
「じゃあまずチェキとか撮影券？　買うのやめな。お金なくて病むんだから」
「それなー？　がち金ないー。バイト増やそうかな」
「なんでそっちいくのよ」

大学の友達と話して「普通」の感覚に触れていくことは大切なのかもしれない。意図的に積極的にやっていくべきことですらありそうだ。一般的な大学生。どんなんだろう。よくわからない男と数十秒話すためにお金を積まない。しかもそれを一か月で三回とかしない。初対面の男にいきなり数万積んだりしない。ライブハウスにいると感覚がおかしくなる。物販に並ぶお姉様方は平気でお財布から何万も取り出す。しかもほぼ全通しているような人たちだからそれが月に何回もある。それに加えてブランド品の差し入れの紙袋も持っていたりするのだ。本当に

お金はどこから湧いているんだ。まぁなんとなくの察しはつくけれど。きっと塾講師のバイトだけでハコに通っている私のほうが変わっているのだと思う。ライブハウスではわたしは異様。でもいち大学生としては普通。たまにそのギャップにやられそうになる。

ライブハウスに通っていると口は悪くなる。爪も長くなる。諸説あり。自分の指よりも長い爪のお姉さんかわいかったな。なんの仕事してんだろ。夜職か。はーい。このノリをバイトには持ち込まないようにしなければ。爪についてはすでに仲のいい女子生徒から「先生爪長くなーい？」とは言われてしまった。でも切るつもりなんて一切ない。だって長いほうがかわいいから。塾長にはまだ指摘されていないからまだセーフ。

ライブを優先すると大学の授業はさぼることになる。大学の友達にノートを見せてもらえばいいのだが、それが何回も続くとこちらとしても心苦しい。なにか一方を優先するともう一方がおろそかになる。そんなこと子どもでもわかる。私はいつだって中途半端だ。だからなおさら自分のことが嫌いになる。

わたしはわたしのことを信頼していない。今まで何度も経験がある、自分自身に裏切られたことは。たぶんかなりの飽き性なのだと思う。これはわたしが産まれ持った性質なのか。だったら嬉しい。だって自分のせいにしなくて済むから。わたしは悪くなくなる。でもこれがただ単にわたし自身に忍耐力がないだとか気持ちが軽いだとか浮気性だとか言われてしまうとさらなる自己嫌悪に陥り、わたしはさらに面倒くさい女となる。

「ずっと」や「永遠」が苦手なのかもしれない。続いた試しがないのだ。一生好きだと思っても、もって長くて四年程度だと思う。短くて一か月。「一生好き」と思ってだ。ある日ぱたりと興味がなくなってしまう。自分でも驚くほどだ。ショート動画で流れてきても一瞬でスクロールするようになってしまう。

こわい。自分でもこわい。今まで熱狂的だったものからいきなり覚めてしまうことが。そんな瞬間が明日訪れるかもしれない。心地よい白昼夢の中に揺られているのがいちばんだいすき。時間は夕方がいい。ここちよいゆうぐれ。十六じとか十七じとか。窓をあけて風とおしをよくして、自然とわたしが融合していく。せかいでいちばんおだやかなじかん。ふわふわしていて現実味がない。それがいい。でも、それにも終わりが来る。寒くなる。暗くなる。光がなくなる。小鳥のさえずりも、車が道路を駆け抜け

ていく音も、なくなっていく。満たされていたわたしから、なんにもないガランドウな私に戻ってゆく。

こんなにも愛しているのに。わたし、こんなにも好きなのに。あなたへの愛でつぶれてしまいそうなのに。

それは自分自身への絶望でもある。やっぱりわたしって中途半端なんだ。本気で何かを誰かを愛することができないんだ。誰からも愛されない以前にわたしが誰かを本気で愛することができないんじゃないか。

ちがう。わたし、心から本命のこと好きだよ。これはほんとうなの。ライブは何回行っても夢のようだし、Xもインスタもあなたからの通知が来るだけで、それだけで心が踊るの。嫌なこともぜんぶ吹き飛んじゃうの。わたしのなかがあなたで満たされていくの。だいすきなの。写真を見るたび、幸せなの。やっぱりかっこいいな、すきだなってなるの。ほんとうに、だいすきなの。こんなにも、だいすきなの。こんなの、あなただけなの。

でもどうせ。今まで何回も繰り返してきたじゃない。どうせまただよ。あんたには無理だよ。人に愛される才能が、人を愛する才能が絶望底に欠落しているんだよ。じゃなきゃあんた、

お金で繋がれた関係に逃げてないでしょ。

今の本命にだって、わたしがわざわざ都会に出てライブハウスに通わなきゃ会えないよ。わたしが撮影券を買わなきゃ話せないよ。撮影会で「またねー！」って本命から言われても、わたしがお金を払わないかぎりその「また」は来ないよ。自分でわかってその道を選んだんでしょ。

ある日突然好きじゃなくなっても、あんたが会いに行かなくなればいいだけの話だもんね。楽だね。気まずくないね。だってもう会いに行かなきゃいいだけの話なんだから。絶望。なくなりたい。

しあわせになれない。

強がる。強い言葉を使う。なにも、愛されることが人生の全てじゃない。仕事が生きがいの人だっているだろう。じゃあライブなんか行ってないで学業に専念したら？　しぬ。はっぽうふさがり。ひらがなはかわいい。かわいいでいきていける。ああ、わたしもうすぐ若さも失われるんだった。ここからどんどん老けて醜くなるんだった。あーあ、忘れてた。るなちゃんのうっかりやさん。もーかわいいんだからぁ。

ペネロペと同じセリフを言ってももうかわいくないよ。痛いばかりだよ。無理しないで、オバサン。最強の女子高生からしたら二十代に入ればもうオバサン呼ばわりだろう。もうあの人、若くないのに。むりしちゃってるのかなぁ笑。こわい。若い子がこわい。なんで。年齢を重ねていくごとに怖いものが増えていくの。なんで。なんで。いやだ。

ライブハウスで優しくしてくれたお姉様方もいっしょだったのかな。若い子には勝てない、とか思ってたのかな。こわいよ。でもみんないっしょ？それはうれしい。だいすきなものがいっしょのだいすきなひとたちといっしょ。みんなでこわがってんの。かわいい。ありがと。どういたしまして。かわいい。かわいい。

「すみません、注文おねがいします」
「はーい」
「えーっと、この、抹茶パフェでおねがいします」
「はい、抹茶パフェで。以上でよろしいでしょうか」
「はい」
「かしこまりました。少々お待ちください」

ひとりで東京に来るのももう慣れた。ひとりでカフェに入って、ひとりで静かな時間を過ごすのも慣れた。さみしくなんかない。ひとりの時間は好き。わたしはひとりの時間を愛せているから大丈夫。

最近ずっと、でっかいパフェを食べたかった。ショート動画で数日前からやけにたくさん流れてくる。わたしがスワイプをやめて見入ってしまうから次々と同系色の動画が流れてくるという単純なメカニズムだろうけれど。普段はスイーツの動画なんて興味がなくすぐにスワイプしてしまっていたのに、ここ数日は違った。すてきだと思った。それを食べればしあわせになれそうだと思った。それは実体を持った、えたいの知れたしあわせの塊のように思えた。

ここの渋谷１０９の上の階のカフェに入ろうとは昨日ふと思いついた。わたしはわたしをしあわせにする。それを実現するにはこれは必要だと思った。

メニューがしあわせだった。ガトーショコラやパンケーキなど、かわいくて色とりどりでおいしそうなスイーツがセンスよく並んでいる。見ているだけで心が踊る。このメニューをデザインした方は今わたしを幸せにしてくれている。しっかりと仕事にやりがいを、生きがいを見出せそう。うらやましい。いや、ダメだ、まともに努力もしていないわたしは「うらやましい」なんて気軽に口走ってはいけない。許されない。努力している方に失礼だろう。メニュ

ーをめくる手つきは心なしか乱暴になったように思う。しかし次のページは少々乱心したわたしの精神を一瞬でときめかせ包み込み、瞳を釘付けにした。そこにドーンとあらわれたのは他でもないすてきに背高なパルフェ。いちご、抹茶、フルーツ。すてき。最高にかわいい。あこがれ。ショート動画でよく見ていたかわいい女の子が食べていたのはいちごやフルーツがふんだんにのったものだったけれど、わたしはわたしが今いちばん食べたいものを選ぶ。それがわたしのしあわせに直結すると思うから。そして選んだ抹茶パフェ。

「お待たせしました。こちら抹茶パルフェでございます」

「ありがとうございます」

ヴィジュアルからわたしをときめかせる。今のわたしはちゃんとおんなのこだ。パフェを純粋に喜べるおんなのこだ。パフェのてっぺんのつややかなソフトクリームには抹茶色のソースが鮮やかにキラキラ輝いている。その脇にはこれまたつややかな餡子とキウイフルーツにかわいらしいスライスされたいちごの断面がすてき。積分。うふふ。わたしはそれらを今から体内に取り込む。妙な高揚感を覚える。わたしが幼い子どもに戻って心が弾む。鼓動が清純なプロセスで高鳴る。

ぱくり。たしかにその効果音で、敢えて子どもらしく大きく開けた口で抹茶ソースのかかったソフトクリームを包み込む。閉曲面。うふふ。香りから、舌からパフェがわたしに魅力を伝えにきてくれる。うれしい。わたしは今、パフェに歓迎されている。

おいしくて、しあわせで、わたし、パフェを食べて泣いちゃった。抹茶パルフェ、千三百円。わたしは千三百円でこんなにも幸せを感じられる女なんだよ。きっとこれがわたしの本来の姿。戻りたい。わたしに戻りたい。

でも、今さら本命がいない日常なんて考えられない。楽しくないよ。すべてが物足りないよ。わたし、もうあなた無しじゃ生きていけない体になっちゃったの。千三百円の抹茶パフェと、三千円の撮影券。今日東京に出てきたのだって、本命盤のライブがあるからだ。ここに来たのはそのついで。本命がいなかったらここのパフェも食べられていなかったし、本命がいなかったらこんな変な病み方もしていない。

「そうそこさーサインとコサイン両方あると扱いづらいじゃん？　だからどっちかにしたいのね。そういうときってなんの公式使ってたっけ……そう

そう三角関数の合成ね。じゃあそれ踏まえてもう一回解いてみてー」

「あーそっかあーね、加法定理ね、お！　ちゃんとこれも公式覚えられてるじゃん、いいねー、でもここで加法定理使っちゃうと……あ、気づいた？　ね、またコサインでてきちゃって元の式に戻っちゃうんだよねぇ。うん、数学だとよくある。式変形していったら元の式に戻っちゃうの。でもまぁ計算が合ってたってことでもあるけどね。よし、じゃあどうするか。とりあえず求めないといけないのが……そう、二つの解の和ね。じゃあヒント！　別にひとつひとつの解をそれぞれ求めなくても大丈夫！　和さえ分かればオッケーってことを踏まえて解いてみて。単位円とかかくと分かりやすいかも！」

式変形してもどうせ堂々巡り。なんで私、数式にメンタル抉られているんだろう。癪すぎる。無意識で脚を組んでしまっていた。駄目だ。このバイトでは最低限生徒の模範になるようにふるまわないと。私は生徒たちの模範であるべきで、それが求められている。

でも私数学好きよ、清潔感があって。お金と同じ理由で好き。

金金金って私いつからこんなになったんだろう。ライブハウスに通い始めたときはただただ純粋な憧れと好きが存在していただけだったのに。お金に焦点なんて行っていなかったのに。

わたしがヴィジュアル系にハマったきっかけとなったバンドの曲が TikTok の音源で偶然流れてきた。そのバンドはすでに解散してしまっているし、流行っているわけではないだろうに珍しい。……やっぱり超絶にかっこいい。好きだ。純粋に、好きだ。この人たちの演奏を生で、ライブで見て聴いて感じたいと純粋に思える。

今ライブに行っているのは、本命に会いに行くため。ライブ後の撮影会がわたしの中のメインなまである。普通の人からは「ライブ行き過ぎじゃない？」「飽きないの？」等聞かれたことがあるが、おそらく一般の感覚とわたしではライブに行く理由がズレている。「ライブで曲を聞く」というよりかは「好きな人に会いに行く」なのだ。好きな人に会う頻度であれば月に三回は別に多くないだろう。もっとほしい。もっと会いたい。これは通常の乙女の感覚であっているだろうか。本命に会いに行く。だからいくらライブがあったも足りないくらいだ。

なんで私はこれが好きなんだろう、とは定期的に考えてしまう。「好き」は私にとって幼いころから難しい。好きな食べ物すら分からない。

「見てルナ！　試験受かってた！」
三月二十六日、年度末のライブでハコの近くでいつもどおりマリーと出会う。そこで彼女が得意げに見せてきた画面には『木村　真理恵　合格』と表示されていた。わたしはマリーと知り合ってから約八か月、はじめて本名を知った。きっとマリーはわたしが『鈴川結月』であることをまだ知らない。でもわたしたちには本名なんてどうでもよく思えた。
「よかったじゃん。これでやっと進級か」
「これ落ちてたら深夜に学校行って腕切って死のうと思ってたからがちでよかったぁ」
「え、ほんとに受かっててよかった、」
マリーは明るく笑いながら言ったが、彼女なら本当にやりかねない。これに落ちてたら本当に死ぬ気だったのだろう。マリーが生きててよかった。わたしたちはなんて脆くてなんて儚い。以前マリーの左手の薬指にはめられていた指輪は人差し指に移動されていた。

好きなものがわからない、そんなわたしでもライブ中はすべてを忘れて幸せで満ち溢れていられる。わたしはライブが好きだ。好きな人たちがステージ上で輝いているのが好きだ。それを間近で目撃できるのが好きだ。ほかでは決して得ることができない興奮と高揚感がそこにはある。好きだ。まさにわたしの命綱。この空間があるからこそ、わたしは生きていける。

これがいつまで続くのかわからない。ただみんな必死に今日を生きているだけ。ライブの予定が二週間以内くらいにあったら嬉しい。会える。生きれる。誤魔化しながら生きていく。わたしの命綱。切られたら死ぬ。
次のライブは来週の木曜日。ほんの二時間前に別れたばかりなのにもう会いたい。ほんとうにだいすきなの。わたしのすべてなの。わたしは生きていける。
帰りの電車で、汚らしいおじが乗ってきた。なんか本命に似た匂いがした。好きだ。あ、本命の匂いってタバコだったんだ。わたしが生きているのは現実。明日も大学。わたしは生きていける。